

(実践活動記録)

H30 四方プロジェクト

1 ねらい

子供たちの実態として、体験や活動から「もっと知りたい、調べたい」という新たな課題を見つけ、より深く追究していこうとする意欲がもちにくい児童が多いように感じる。そこで、体験活動を重視し、そこで抱いた追求テーマや疑問などを自覚させるために、学級の友達と情報交換しながら気付きの交流を図れるようにしたいと考えた。

そこでは、視点や考え方が深まる姿や、自分と友達の考え方や感じ方、価値観の違いなどに気付き、互いを尊重し合う姿を期待する。さらに、地域の方々との交流を通して、自分の住むふるさと四方について実感したり、自分の活動を振り返ったりしながら、地域のために自分ができることを考え実行する姿を期待した。

2 実践事例

第6学年 総合的な学習の時間・四方プロジェクト～ふるさとを盛り上げよう！～

① 学習へ期待が膨らむ子どもたち

本校の第6学年は、従来から「ふるさと四方」をテーマにした総合的な学習の時間を実践してきた。地元の自慢や特産物等について、実体験を重視しながら、情報収集し、まとめ、そして発信していく学習を進めている。昨年度の3学期、富山市北商工会青年部から、「地域おこしを子供たちと一緒にできないか」と提案があった。商工会青年部のねらいは、子供たちに商品開発から出店販売まで経験させ、その過程を通して、子どもたちにお金の大切さやお金を稼ぐことの難しさを学ばせるとともに、地域のよさを広めていこうとするものであった。

学校は、地域の活性化を願う気持ちに賛同した上で、適正な学習材としての関わり方について何度も商工会と検討する時間を設け、学習の道筋を確認し準備した。


北日本新聞
 2018年5月8日(火)掲載



模擬会社運営に挑戦

四方小 市北商工会青年部が企画

富山 子供たちが模擬会社を作り、イベントでのアース運営などを通してお金の流れを学ぶ。三井物産の地域おこしクリエイティブ事業が7日、富山市四方小学校で始まった。6年生31人が給料の仕組みや収支の計算方法を学んだ。

地域の資源を知り、お金の大切さや稼ぐ難しさを理解してもらおうと、同市北商工会青年部(寺本賢部長)が企画し、2回目。小学校と協力し、初めて平日の授業時間を活用する。青年部のメンバーが進行役を務め、9月10日まで計6回行う。

児童は4グループに分かれ、商品や社長、会計部長など

どの役職を決める。今後、市場調査や宣伝方法、価格設定、決算書の作り方を学ぶ。7月29日には同市和合地区である「WaGo」だらまつりに出店する。上田孝君は「しっかりもつければいいよう、準備を頑張りたい」と意気込む。事業の中心となる青年部の小原和也さんは「損得や利益について真剣に考える子どもたちと一緒に、メンバーも成長していきたい」と話した。

◇ この記事は、webunで会員以外の方もご覧いただけます。

学習のロードマップ

- ①地域の「よさ」を考えよう→②地域の「よさ」を生かした店の出店を考えよう→
- ③出店に必要な予算や、利益を考えよう→④地域の「だらまつり」で屋台を出店しよう→
- ⑤売上金の使い方を考えよう→⑥PTAバザーで出店しよう→⑦売上金の使い方を考えよう→⑧活動をまとめよう

商工会青年部の方々と導入の学習を終えた子どもたちは、自分の作った商品を買ってくれる人があるという実感に伴い、学習意欲を高めていくこととなった。

【学習導入時の子どもの感想】

私は、今回のプロジェクトをする上で、お祭りのお客さんに商品を買ってもらえるか、赤字にならないか、とても心配です。でも、楽しいことは2つあります。1つ目は、四方のよさを生かした商品を作って、地域の方々に四方の良いところを伝えることができることです。もう一つは、お店を自分たちで作れるということです。お客さんに喜んでもらえるような商品をぜひ作りたいです。

このプロジェクトは楽しみです。みんなでアイデアを出して、商品の材料を考えて、そして自分たちで製造するのは、とても楽しそうで、早く始めたいです。

お客さんの前に出て緊張しないか、計算ミスをしないかなどとても不安です。でも、みんなで確認や協力をして不安をなくしていきたいです。

② 自分たちのアイデアが商品に生かされる喜びを感じる子どもたち

四方の自慢できるお店を調べていた子どもたちは、お店をPRするためにも、自分たちでデザインした商品の開発を進めた。例えば、地元のケーキ屋さんを追求していたグループでは、グループの話し合いの中で、自分たちが5年生のときに取り組んだ学校花壇に招待した地域の人たちのうれしそうな様子を思い起こし、今回の自作クッキーのデザインにも、学校花壇のデザインを取り入れようと製作を進めた。



クッキー制作グループ



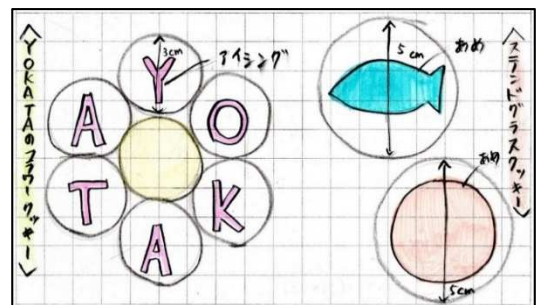
キャンドル制作グループ



かまぼこ制作グループ

商品製作において、お店の方と意見を交わし、商工会の方のアドバイスを受けながら試行錯誤する中で、ただ単に作りたいデザインでは、材料等の問題が生じ商品化が困難だったり、利益が生じなかったりするなど難しさを感じた子どももいた。

ケーキ屋さんグループは、何度もデザインや材料の変更をしながら、花をモチーフにしたクッキーを作ることとなり、お店の厨房でお店の方と一緒にクッキーも試作した。一連の活動や思案を通して、利益が出る商品開発に自信をもつことができた。また、自分たちの商品アイデアについて、商工会青年部の方に承認を得るためにプレゼンテーションした際、「素晴らしい！地域のよさを取り入れた商品を考えるアイデアが出てくるとは思わなかった。子どもには、大人とは違った発想ができるのだと驚かされた。」と言葉をかけていただいた。専門家から高評価を得たことで満足感や充足感を得ることができた。



<クッキーの最終デザイン>

【子どもの感想】 私は、クッキー作りをしました。材料費を計算して、何度も個数や単価を確認しながら作りました。自分として難しかったのは、お店の人との打合せです。自分たちの思いなど、大切なことをどう伝えたらよいかすごく迷いました。でも、みんなとアイデアを出し合う中で、だんだん目標に近づいていることが実感できました。改めて、友達の良さを理解できました。

③ 自作商品の販売を通して、喜びと感謝の気持ちがあふれた子どもたち

和合地区の商工会祭り「だらまつり」は、7月下旬に行われた。4月から開発制作してきた自作商品をいよいよ販売する日であった。自分たちの作ったクッキーやかまぼこが祭りに訪れたお客さんの目に止まるのだろうか。何か質問されたらしっかりと受け答えできるだろうか、いろいろな不安をもちながらも懸命に声を出して売り込む子どもたちであった。想定していたよりも、早く売れていったことに充実感を感じることができたようである。「どんどんお客さんが来てうれしいね。」「もっといっぱい作ればよかった。」と、友達と喜びを分かち合うことができた。



＜「だらまつり」での屋台販売の様子＞



【子どもの感想】 私は、物を売ることの大変さを学んだと思います。2種類作ったクッキーのうち、1種類はなかなか売れませんでした。売るために、宣伝をずっと続けて、ようやく少しずつ売れるようになってきました。物を売るためには、ただ作るだけでなく、どうやって売るかも大切だし、大変であることが分かりました。

【子どもの感想】 私は、地域おこしクリエイティブ事業を通して、友達大切さを学びました。一人ではできないことでも、友達や同じグループの人がいればできるからです。今回の販売も、友達がいたからできたと思うし、全部売り切ることができたのだと思います。みんな、ありがとう！

2学期には、「だらまつり」で得たお金をどのように使うかを話し合うところからスタートした。子供たちの中からは、「学校が楽しくなるものを買って在校生に残したい」という意見が出た。その一方で「がんばった自分たちのごほうびとして使いたい」という意見もあった。しかし、1学期の収益金では両方を満足させることができない状況だった。そこで、教師から、「今度は、PTAバザーの際に、自分たちの力でお店を

出してはどうか。」と提案した。学校や地域のために使うお金以外に、自分たちが使うお金を増やそうという願いのもと、2学期の活動が始まった。

話合いの結果、商品は、写真を入れたオリジナル缶バッジに決定した。仕入れ値や販売個数の予想など、1学期の「地域おこしクリエイト事業」で学んだ経験を生かして活動する姿があった。

P T Aバザー当日、子どもたちは、P T A会長に依頼し、バザー会場に自分たちのブースを設け、販売活動を行った。

P T A会長からの「やりたいことはよく分かる。素晴らしいと思うよ。小学生生活最後のバザーを、自分たちが楽しむことも忘れないでほしい。」という言葉は、自分たちの活動を認めてもらえた証であると感じた。さらに、地域の方々が、親子の写真を缶バッジにしてほしいと買いに来てくれたり、四方小学校の校舎の缶バッジを思い出になるといって感謝しながら買ってくれたりした。地域や保護者の温かい心に触れ、子どもたちは、取り組んできたことに自信と充実感を感じながら活動した。この活動で得た収益を、これまでお世話になったみんなへ還元できたらと願う子どもたちであった。



＜缶バッジ販売の様子＞

全ての活動を終え、子供たちがどのようなことを学び、感じたのか、収益金をどのように使うかについて話合いの場を設定した。子どもたちの中には、学校に何かを残したいという思いが強かったが、友達の「余ったお金（端数）は募金したらいいと思う。」という考えを聞き、振り返りカードに「おもしろい」と記述した。委員会活動を通して、全校に募金を活動していた子どもたちだからこそ、自分たちの委員会の活動と結び付けて、お金の使い方を考え方の違いに目を向け、新しい視野を広げることができた場面であった。

【子どもの感想】 私は、自分たちのがんばりをほめたい。だから、売り上げた利益は、自分たちのために使いたい。また、学校にも使いたい。でも、周りの人たちの意見を聞いて、商工会青年部の方々にもお礼がしたいとも思いました。また、募金をするという意見も出たので、それもいいと思いました。

【子どもの感想】 今日、みんなでお金の使い道について話合いをしました。話し合う前は自分たちや学校に使うことしか考えていなかったけど、お世話になった方々へのお礼や、募金するという意見が出ていて、おもしろいなと思いました。

この活動を通して、子どもたちは、必要感をもって友達とじっくりと話し合うようになった。また、みんなで商品を制作する喜びや達成感を味わいながら、話合いの中で、互いのよさや価値観の違いを感じ取ることができた。

さらに、地域の方々とともに地域の活性化を目指す取り組みを通して、自主性をもって地域に貢献できる喜びを味わうことができた。地域への愛着を深め、生き生きとした地域を盛り上げていこうとする意識が子どもたちの中に育ったように感じる。

笑顔 あふれるふれあい花壇 づくりプロジェクト

第5学年は、総合的な学習の時間を中心に、全校児童にも参加を呼びかけながら、花壇作りを行った。花を育てる活動を通して、命あるものへの慈しみの気持ちを高めるとともに、継続して取り組む難しさや、努力することの大切さなど、豊かな感性をはぐくむことをねらいとしている。

本校では、四方のまち全体を明るくしていきたいという、長い間受け継がれてきている先輩の思いをしっかりと受け止め、今日まで活動している。

全校に花壇のデザインを募集したり、全児童がいっしょに花苗や種を植えたりもしながら、愛情をもって世話をしてきた。さらには、地域の住民、PTA も、学校の周りの遊歩道のガーデンニング整備を続けて



<花壇の土の掘り起こし作業>



<苗をポットへ植替え作業>



<花壇への植替え作業>



<地域の遊歩道への苗植え>

いる。今年は、夏の暑さで花の生育状況も悪く、子供たちの思いの通りには花壇の花は育たなかった。子どもたちも、懸命に草取りをしたり、水やりをしたりしていただけに残念そうであった。

【子どもの感想】 すてきな花壇になるようにと、みんなで話し合っ『笑顔かがやくポカ友マリン・ガーデン』と名前を決めました。

また、花壇のデザインも決めました。デザインの中には、虹や太陽を花の色で表現した楽しいデザインになりました。花の種類や、咲く季節なども調べているうちに、花のことについて詳しくなれたようでうれしいです。

【子どもの感想】 草むしりは、自分から進んでするようにしました。休み時間ごとに花壇に行って草を取りました。クラスのみんなと協力して草むしりをしていたら雑草がなくなってきれいになったので、協力してよかったな。」と思いました。

自分から積極的に行動することが大切だし、みんなと協力することとても大切だと思いました。

【子どもの感想】 私は、花だん作りをして笑顔いっぱいになったと思います。全校に『花つみ大作戦』を提案しました。最初は、全然人が来てくれなかったけれど、次の日、たくさんの1年生が来てくれました。1年生もつみながら笑顔でしていたので、いっぱいになったと思います。5年生みんなで雑草を抜いたりもしました。草むしりをすると、最初よりきれいになりました。花はたくさん枯れてしまったけれど、すてきな花壇がつくれていたのがうれしかったです。

【子どもの感想】 みんなで協力してやっていると、笑顔になる人が増えたと思います。自分は、パソコンで花のことを調べました。一つのキーワードからいろいろなことを知ることができました。みんなで一つの課題を調べたり、まとめたりすることを通して、「協力」を学んだと思います。

3 成果と課題

【成 果】

総合的な学習の時間において、各学年で自分たちの暮らす地域の「ひと」や「もの」について、体験的活動を中心として学習を進めた。地域と自分のつながりを考えるとともに、多くの人と関わることを通して愛着が深まっている。

また、年間の見通しをもって地域との交流活動を展開することによって、「地域を活性化させたい。」「地域の子どもたちのために尽力したい。」という地域の方々の学校への期待を理解し学習に生かしていくことができる。名跡巡りや伝統的行事への参加、さらには、お年寄りの方々との交流を通して、子供たちが地域の中で見守られて成長していることが実感できる。

地域と深い関わりをもって学習を展開できたことは、まさしくこれからの「社会に開かれた教育課程」の実現に向かう取り組みのきっかけとなった。地域を活性化していくとする多くの方々の思いや努力を直に感じ、共に歩んでいく方向性を今後も研鑽して、地域連携、地域活性化の取り組みを進めていくことが大切である。

【課 題】

学校花壇作りは、地域と学校が共通した思いをもって花と緑でいっぱいにして明るいまちをつくろうと取り組んでいる継続した活動である。花を育てる活動を通して、住みよいまちづくりというのは、そこに暮らす人々の温かく、深いコミュニケーションが基盤となっていることが実感できている。学校花壇を通して、学校にとって地域とつながりを深めるきっかけとなっているとともに、子供たちや教職員にとって地域の方々に学び育てられている場として息づかせていくことが大切であると考えます。



「和合だらまつり」で全商品を完売した後の6年生と富山市北商工会青年部の皆さん